第１章

イランの生態圏と地域的構成

第１節　用語・概念上の問題

イラン社会が基本的に幾つもの地方的かつ重層的な地域社会の小宇宙（ミクロコスモス）によって構成されているというイメージを，とりあえず最初の出発点に置くとしよう。それらのうちから一つの「小宇宙」たる地域的纏まりを選び出し，具体的に一地方の個別的事例研究を行なうとする。この場合に，とりわけ我々外国人地域研究者が地方に着目し，地方に密着しつつその中央との関係に焦点を当てようとする理由・目的は何であろうか。

それは言うまでもなく，個々の研究者の問題関心に応じて際限なく多様であろう。だがそれらをある幾つかの類型にまとめることは可能だと思われる。恐らくそれらのなかで，イランの社会を空間的に広がるネットワークの総体として把握する方向，近代化過程における伝統的社会構成体の変容の諸態に関心を向ける方向，イランの国内外の言語的あるいはエスニックな構成と中央集権化の軋轢に関心を向ける方向などは典型的なものであろう。

上記のように様々な方向からイランの地方の問題が扱われる直接的な背景の一つは，言うまでもなく地方の研究がそのままで国際的な問題に直結するという点である。クルド問題，アゼルバイジャン問題，バルーチェスターン問題，対中央アジア政策など，これらの問題はすべてイランの中央と地方のダイナミズムのなかに位置づけてみて初めてその問題の本質的理解が可能となると思われる。

イランは多様な地方が分からなければ結局理解されないという言い方は，従来から台詞のごとく言い古されてきた言葉だが，イラン地域研究にとって「中央—地方関係」と概括される諸問題が具体的にどのようなかたちで扱われてきたのか，そこで言われている「地方」とは中央の動向をいかなる意味で方向づけているのか。イランにおいて固有な中央・地方の関係とは具体的にどのようなものか。本稿においてはそのような点を考察するために，先ず基本的な概念の整理を試みることにする。

イランにおける中央と地方の関係を考察する場合に，「中央—地方」との関わりで，中心と周辺の関係，都市と農村の関係，中央集権化と地方性の問題をどう位置づけていくべきであろうか。

現代イランにおける国家と社会の関係の考察に際して，歴史的に元来重層的であった地域社会は，現状としての国民国家を前提として考察をしようとするかぎり，常に「中央」(central city＝テヘラン)に対する「地方」(provinces)として多かれ少なかれ垂直的な権力関係のなかに位置づけられてきた。このような「中央」に対する「地方」の従属的・客体的なあり方は，歴史的には言うまでもなくレザー・シャー以来の急激かつ強権的な中央集権化政策のなかで急速に形作られてきたものであった。これを「中心」(center)による「周辺」部ないし「周縁」部(periphery)の侵食過程，あるいは「中心」—「周辺」の(孤立を含めての)「水平関係」から「中央」—「地方」間の強制的「垂直関係」への転換過程として位置づけることができるであろう。

このような強制的収斂過程に対する社会的抵抗の原理が，「地域」性(regionalism)であると言いうる。それは行政，教育，産業，文化などあらゆる面における国家—社会的な階層的構造を突き崩し，転倒させようとする方向性を本質的に内包している。このような抵抗のイランにおける典型的な例が，クルディスターンの自治要求運動であろう。この原理が機能しつづけるかぎり，イラン社会は逆説的ではあるが健全さと安定性を保障される。ところが「中央」による周辺地域の「地方」化(いわゆる中央集権化)がいわゆる「中央集権化」の名のもとに過度に強権的に推進されると，元来階層構造に収まりき

らない地方的な原理がやがて行き場を失って噴出することになる。

このように重層的かつ分散的な地方的性格をもつイラン国家において,「都市—農村 (urban-rural) 関係」は各々の地域内における社会的関係のなかに具体的に投影されていると言えるだろう。この場合一般論として「都市—農村関係」を以下の諸要素に分解して考えることが可能である。(1)商業的・社会的機能，(2)行政的サービス機能，(3)都市的文化・思考様式の伝播，(4)農業余剰の移動，(5)人口移動。そして(1)の商業的機能は(5)の人口移動とともに「都市—農村関係」の主要部分をなすと考えることができよう[1]。ここで例えば農村を，都市を取り巻きその影響を受ける周辺の人が生活を営み耕作する地域と考え，そのような空間的範囲を仮に「機能的地域」と呼ぶことにすると，これに対して景観的・風土的な一体性を重視して「景観的地域」を想定することが可能である[2]。そしてイランにおいては多くの場合，上記の「機能的地域」と「景観的地域」が密接に関わり合っていると考えられるのである。それはイランにおける農村の存在の仕方が分散的であることと関わっており，また都市および農村の立地条件が伝統的に水の確保と交易路という外部条件によって強く規制されてきたことに関係する。そのようなイランの都市群のなかで，テヘランの優位はあくまでも相対的なものであったにすぎず，一方それぞれの地域社会にとってはその代表する「地方」都市こそがその地域の性格を決定し表現する最も重要な要素の一つであるということができる。なおこれと同様の考え方が近年イスラーム研究の文脈で「都市的な宗教としてのイスラーム」として議論されている。そしてイスラーム世界の都市に共通な特徴を見出そうとすれば，それはバーザール（あるいはスーク）の構造に収斂するとされる[3]。ここで主要なイランの伝統的都市の成立条件が，水などの基本的インフラの条件と並んで交易路の結節点としての地理的条件を重要な要素として含むことは特に重要である。

ここで地域的空間の文化諸要素を象徴化した具体的なテキストの例として，1986年制作の映画『バシュー，小さな異邦人』（バハラーム・ベイザーイー監督）を見てみよう。イラン南部のフーゼスターンの少年が当時のイラン・イラク

戦争中の爆撃で両親を失い，たまたま乗り込んだトラックでギーラーン地方のとある農村に運ばれる。そしてナーイーという女性の庇護のもとに成長し，出稼ぎに出ていたナーイーの夫も最後に彼と生活を共にすることを受け入れるという筋である。このなかで周囲の好奇の眼と迫害からバーシューを守るだけの強い意志と独立心を持ち合わせた女性ナーイー自身が，ある意味ではギーラーンの土地を象徴する人物であるとも言いうる。だがそのことを別にしてもこの作品はイランのなかで殊に地方色の豊かなギーラーンの文化的シンボルをふんだんに見せてくれるのである。

冒頭近くの緑の山がすでにギーラーンを象徴する。トラックの中で寝ていたバーシューは牛の鳴き声で目が覚める。沿道の緑の木々，瓦屋根，緑の土地。手で飯を食べる工事現場の男，深い森，田んぼ，ぬかるんだ土地，これらはすべてギーラーン地方の固有性を構成する最初の象徴である。この緑の山を背にした緑の土地は常にこの映画の舞台となる。

次には言葉の問題。本書の第6章でも触れられているとおり，ギーラキーと呼ばれる地方語はこの地方の地方色を決める重要な構成要素である。バーシューはアラビア語を喋る。また腹の空いたバシューが最初にナーイーが好意で置いていったパン（ヌーン）を吐き出す。どうもパン（ヌーン）の味が違うようだ。ナーイーは米のパンを作るために小さな臼を碾いている。それからバーシューの黒い肌の色は常に話題になる。だが同時に肌の色は彼らを隔てる障壁でもある。ナーイーと2人の子供が稲を早く育てるために音を立てる場面がある。稲の倉庫，かま（ダース），米，水の豊富な川での水浴び。

ギーラキーの子供たちにいじめられるバーシューが必死にペルシア語の教科書を取るが，彼らのコミュニケーションにとってペルシア語は何と無力であることか。バーシューは落ちていた教科書を拾って読む。

Iran sarzamin-e ma-st. Ma az yek ab va khak hastim.

Ma farzandan-e Iran hastim.

イランは私達の国土です。私達は同じ土地（水と土地）に住みます。

私達はイランの子です。

「同じ土地に住む」というイラン国家のイデオロギーが，ここではあまりに空しく響く。彼らを結びつけるものは決して同じ風土でも同じ言葉でも，同じ肌でもない。あえて言えば，それはバーシューの両親を奪った戦争が(作品中では明示していないが) ラストで登場するナーイーの夫の右腕をも奪ったということであろうか。

土地の象徴を続ける。イランではほとんどショマール（ギーラーン州およびマーザンダラーン州）のみに独特な週市の場面である。買い物篭，毛糸の手袋，ニンニク，皆が週市に向かう山道，週市での風景，ござ売り，週市の女たち，週市の呼込みの声，茶屋の女，干した魚，ネイ売り，ギーラーンの音楽，荷馬車。そして週市の店仕舞いまで。

しばらく姿を隠していたバーシューを川で取り押さえる魚捕り網，稲よ伸びろとバーシューが音を出すのにつられて子供たちが田植えの踊り，稲刈りの踊りを始める。稲刈りの季節，黄色く実った稲穂，女たちの刈り取り作業。刈り取った稲を運ぶ。バーシューの作る藁のかかし。ラストでバーシューとナーイーの家族は田に入った猪を追う。稲をついばんでいた鳥たちも一斉に飛び立つ。

このように『バシュー，小さな異邦人』にはイラン人が観れば一遍で分かるようなギーラーン地方に固有の文化的象徴がちりばめられている。そしてそれらを物語の構成要素としてふんだんに使いながら，個別性のなかに埋没することなく「家族の絆」と要言できるようなより普遍的なテーマを追求しているところにベイザーイーの映画監督としての並々ならぬ力量がうかがえるのである。

ともあれここに具体的に示されているような地域的な個性は，それぞれイランの近代国家としての歩みのなかで絶えず中央権力との緊張関係を保ちながら，全体としてイラン人の国民意識の具体的な内実を構成してきた。それは常にイランの中央からのイデオロギー的な収奪に直面しながら，同時に国家権力との緊張関係にとって蘇生を繰り返してきた。

第2節　これまでイランの中央—地方関係はどう把握されてきたか

19世紀の後半以来，イランは急速に近代化への歩みを強めることになるが，その出発点におけるイランの社会的・政治的条件について，我々はどのようなイメージをもっているだろうか。近代化前夜の19世紀前半のイランについて，欧米の代表的な歴史研究者の一人アブラハミアンは以下のように描き出している。

「国土の自然地理的な条件は（イランの）社会的なモザイク構造の基礎であった。航行可能な河川や湖の欠如，年間降雨量の著しい不足……，ザグロス，アルボルズ，メクラーン，高原地方の四方の峻険な山々に囲まれた巨大な中央の沙漠地帯。これらはすべて人口を閉鎖的な農村，孤立した都市，遊牧部族にばらばらに閉じ込める結果となった。」(4)

それ以降19世紀後半からの社会経済的変動，パフラヴィー朝のレザー・シャーによる上からの急激な中央集権化政策，第二次大戦後の混乱と民族主義の高揚，1953年以降の政治的抑圧と62年からの「白色革命」と急速な経済発展という革命前までの多くの矛盾に満ちた展開については本書第3章，革命後の現状については第4章で主に農村地域の問題を中心に扱われるが，ここではそれらの議論を補完すべく都市，遊牧部族，国境の観点からイランの中央・地方関係に言及している研究を若干検討してみよう。

まず都市を軸に地理学的な観点から調査を行った報告として，イングリッシュによるケルマーンの報告(5)やコステッロのカーシャーンの報告(6)がある。これらの研究は，例えばアブラハミヤンなどに比べて中東における都市の周辺地域に対する影響を重視する。イングリッシュはその結論部で述べている。

「19世紀においてすら，ケルマーンはインドへの幹線上の重要な通商センターであると同時にナッツ，乾燥果物，香料，肩掛け，絨毯などの周辺地域での生産によって——これらの積み替え貿易によってでなく——大いに

潤っていた。都市はいかなる意味においても孤立的でない。それはむしろ地域的な居住分布の中心である。……それゆえケルマーンの存在は貿易路上の偶然的な位置によるのでなく，周辺地域の資源の分配と利用による。」[7]

一方遊牧部族の調査報告としてはガシガーイーに関するベックの一連の報告[8]，バフティヤーリーに関するガースウェイトの報告[9]，ロレスターンに関するブラックミショーの報告[10]，シャーサヴァーンに関するタッパーの報告[11]などがある。このうち例えばベックはガシガーイーの居住地域について以下のように記している。

「立憲革命期(1906～11年)の短い時期を除いては，中央権力はガシガーイーを首都に対する軍事的な脅威と感じたことはなかった。レザー・シャー以前には，ガシガーイーの指導者たちは国家権力に真面目には従わなかった。彼らは多くの場合むしろテヘランとの繋がりをファールス地方における彼らの部族的・階級的利益のために利用した。レザー・シャー期になると彼らは体制内部における自分たちの地位の強化に邁進し，一部は国家権力そのものを求めた。だがガシガーイーは首都から遠くに位置しているために，一度国家が彼らの指導者を罰するためにガシガーイーに制裁を加えたケースを除いて，その社会は中央における彼らの指導者の権力闘争とはほとんど無関係であった。」[12]

これ以外にイランの中央・地方関係および風土論に関わる最近の研究としては，マクラクランらの国境線に関する地政学的研究の報告[14]，イランの主要都市を通観したヘイラーバーディーの研究[15]などがある。このうちマクラクランらの報告は「イランの国境がこの数世紀間不安定でありつづけ，ことに19世紀以来20世紀初頭までの性急な国境策定はその後も禍根を残しており，それらの幾つかは必ずしも直ぐに解決されるものでない」ことを具体的に跡づけており，「イランがこの問題を回避するのは今後とも容易ではない」としている[16]。またヘイラーバーディーはイランにおける都市の成立条件を自然環境，交易路との関係，宗教的な要件に分けて具体的に論じる。

以上のように欧米のイラン研究においては自然的環境と人間の相互的な関り合いとそこから生まれる人間類型と空間的な個性に関する関心は比較的弱く，その意味で序章で触れたような風土論的な考察は，イランに対してこれまで十分なされてこなかったのではないだろうか。

第3節　イランの地域的構成モデルの提案

筆者は1991年の秋に，アジア経済研究所からの海外派遣の最後にガズヴィーン，ラシト，タブリーズ，オルーミーエ，マハーバード，バーフタラーン(現ケルマンーシャー)，ホッラマーバード，イーラーム，デズフール，アフワーズ，ブーシェフル，ヤースージ，シーラーズ，ラール，バンダルアッバース，バム，ケルマーン，ヤズドなどの都市を陸上交通により移動してザグロス山脈を駆け足で廻る旅行を試みた。また1994年の秋にはマシハドからビールジャンド，タバスを経てヤズド，エスファハーンに至る旅行も行なった。以下の議論はその時に得た印象を出発点にしている。

そのときに得た全体的な印象として感じたことは，一つは地方のことは地方に足を運ばなければ決して分からないということであり，また同時に地方の状況に埋没してしまうや否や全体(地域全体であれ国全体であれ)の状況を見失ってしまうという絶対的な矛盾であった。このような限界を乗り越えてイランの地域社会を全体的な構図の中に当てはめることは，イランを対象とする地域研究者にとって最初の難関であるとすら思われた。

筆者が2年間の研究会を組織してイランの地域社会をどう認識するかという問題に取り組んだそもそもの出発点はここにあるが，同時に地域的な小状況と国家レベルの大状況を認識レベルで橋渡しするための仕組みとして，筆者が考えてきたのは，現在のイランにおける最上位の行政区分である25の州別区分をとりあえず取り払って考えてみる（あるいは全25州を同じレベルで取り上げようとしない）ということであった。表1をみると明らかなように，各

表1　イランの行政区分の現状
（単位：キロメートル，1,000人）

州　　名	州　都　市	面　積	人　口
テヘラン州	テヘラン	40,836	10,727
ホラーサーン州	マシハド	315,687	5,997
マーザンダラーン州	サーリー	46,645	3,793
エスファハーン州	エスファハーン	105,805	3,657
ファールス州	シーラーズ	120,006	3,480
東アゼルバイジャン州	タブリーズ	44,767	3,255
フーゼスターン州	アフワーズ	66,532	3,155
西アゼルバイジャン州	オルーミーエ	37,599	2,284
ギーラーン州	ラシト	14,820	2,204
ケルマーン州	ケルマーン	185,675	1,790
ハメダーン州	ハメダーン	19,445	1,649
ケルマーンシャー州	ケルマーンシャー	23,622	1,601
ロレスターン州	ホッラマーバード	28,560	1,471
スィースターン・バルーチェスターン州	ザーヘダーン	181,671	1,440
コルデスターン州	サナンダジ	27,858	1,233
中央州	アラーキ	29,530	1,183
アルダビール州	アルダビール	18,451	1,135
ザンジャーン州	ザンジャーン	23,767	1,031
ホルモズガーン州	バンダルアッバース	65,379	924
チャハールマハール・バフティヤーリー州	シャハレコルド	14,820	723
ブーシェフル州	ブーシェフル	25,360	692
ヤズド州	ヤズド	69,605	691
ボイエルアフマド・コフギールーイェ州	ヤースージ	13,699	477
セムナーン州	セムナーン	91,544	457
イーラーム州	イーラーム	19,086	425

（注）(1)　州境は1994年3月現在。
　　(2)　人口は1991年9～10月現在。ただし一部は注(1)時点での州境に合わせて筆者が推測した。
（出所）『イラン統計年鑑1372（1993／94）年版』より筆者作成。

州ごとの人口は最大のテヘラン州と最小のイーラーム州のあいだで23倍もの開きがある。また全国的な中心たるテヘランの存在するテヘラン州を例外と考えるとしても，残る24州の人口規模はイーラーム州からホラーサーン州まで正にまちまちである。

同時に面積についてみても，人口過疎な沙漠地帯を有するホラーサーン州，ケルマーン州およびチャハールマハール・バフティヤーリー州の3州は極端

表2　現代イランの人口20大都市

（単位：1,000人，倍）

都　市　名	1991年人口	1956年人口	倍　率
テヘラン	6,476	1,512	4.28
マシハド	1,759	242	7.27
エスファハーン	1,127	255	4.42
タブリーズ	1,089	290	3.76
シーラーズ	965	171	5.64
アフワーズ	725	120	6.04
ゴム	681	99	6.88
ケルマーンシャー	624	125	4.99
キャラジ	442	15	29.47
ザーヘダーン	362	17	21.29
オルーミーエ	357	68	5.25
ハメダーン	350	100	3.50
ラシト	341	109	3.13
アラーキ	331	59	5.61
ケルマーン	312	62	5.03
アルダビール	311	66	4.71
ヤズド	275	64	4.30
ザンジャーン	254	47	5.40
バンダルアッバース	250	18	13.89
ホッラマーバード	249	39	6.38

（注）　テヘランの1956年の人口については，タジリーシとレイの人口は含まれていない。

（出所）　『イラン統計年鑑1372（1993／94）年版』より筆者作成。

に大きいが，それ以外の諸州についてみてもその広さは最大で8倍もの格差があり，どれが典型ということは不可能である。しかもイランの場合，州ごとの人口規模と面積が必ずしも相関していないということが特徴である。

そこで次の発想は，イランを幾つかの地域的な構成として捉え直す場合に，人口の集中している地方都市をその中心において考えるということである。イランにおける現行の都市（shahr）の定義は行政的に市役所（shahrdari）の置かれているところということになっているが，革命前の人口統計調査では5000人以上の居住する場所という定義づけがなされていた。それはともかくとして表2をみると明らかなように，主要都市はこの35年のあいだにそれぞ

れ人口が3倍から6倍程度に激増している。そのなかでも人口規模を勘案するとマシハドの人口増加は突出しているということができる。一方アゼルバイジャン地方のタブリーズが35年のあいだにイラン第2から第4の都市に順位を落としていることは，今世紀におけるタブリーズの商業都市としての地盤の低下を物語っている。

ここで付言しておくと，筆者の関心はあくまでも現状におけるイラン国家の空間構造の適確な認識ということであり，その意味で現在よりも遙かに広大な領域を含んでいた歴史的な「イラン世界」をめぐる問題はここでは考察の対象外である。しかしそれはイランの現状の空間的理解にとって過去の「イラン世界」が重要でないということを必ずしも意味していない。

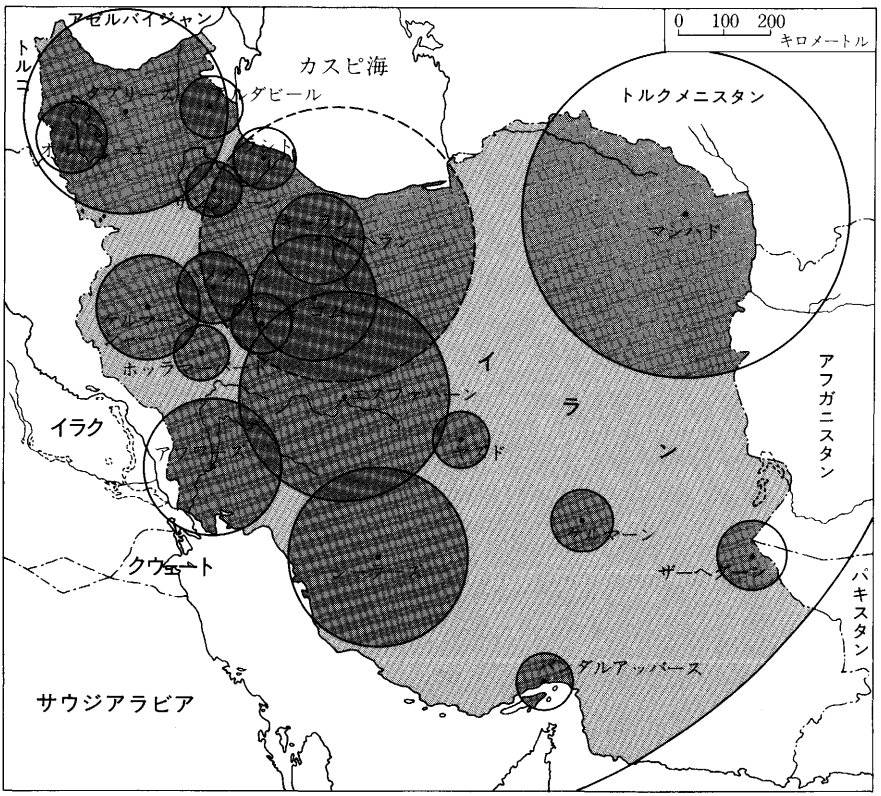
さていま試みにこれらの都市をイランの全国図の上にマッピングしたうえで，各都市を中心として人口5000人当たり1キロメートルの半径で換算して円を描いてみよう。こうした極めて単純な手続きを経た地図1をみると，イランの（都市の側面からみた）地域的な編成を案外よく物語っているように思われる。

すなわち各都市を中心とする円周の内側をおおよそその影響の及ぶ範囲と読み替えることにすると，テヘランの影響力はほぼ全国的に行き渡っており（これは勿論そう見えるように円の半径を設定したのであるが），最も遠隔の地であるバルーチェスターンはその距離ゆえにその影響力が及びがたいという単純な事実が確認できる。

つぎにマシハド，エスファハーン，タブリーズ，シーラーズ，アフワーズの五つの都市が，全国的にみて特に大きな影響力を有していることがうかがわれる。そしてこれらとテヘランを結ぶ幹線が，イラン国家の骨格ともいうべき基軸を形成していることを考えれば，イランの最も基本的な地域圏は上記の5都市，あるいはテヘランを加えた6都市を中心として形成されていると仮定することができるだろう。

これ以外の主要都市については，大略二つのグループに分けて考察することができる。一つはテヘランから直線距離にして300キロメートル以内（地図

地図1　イランにおける主要都市の人口規模と立地



（出典）　筆者作成。

1上ではテヘランを中心とする点線で示した円周の内側）の諸都市，もう一つはそれ以外である。

第1のグループにはキャラジ，ゴム，アラーキ，ハメダーン，ザンジャーン，ラシトの6都市が入っている。これらの諸都市はもちろんそれぞれ相対的にテヘランからみて独自の地域圏を構成しているが，やはり全国的なレベルではテヘランの様々な影響下にあるとみるべきであろう。そうするとこれらの都市を中心とする地域圏は特に巨大都市テヘランの影響力を強く受ける

地域圏内の小地域圏として位置づけるのが妥当ではないだろうか。

テヘランの影響下という意味では特に顕著な位置にあるのがキャラジである。元来テヘラン自体が周囲のレイやタジリーシを呑み込みながら成長・拡大してきたのであるが，キャラジはテヘランからの距離を考えれば今後とも相対的に独立した都市として存続しつづけるであろう。しかし同時にテヘランが首都としてあるかぎり，そのベッドタウンとしての性格を強めつづけるだろうこともまた疑いない。

一方ラシトなどは，テヘランからの直線距離が300キロメートル以内にあるとはいえ，テヘランの地域圏内にあるとすることはためらわれるかも知れない。事実ラシトを中心とするギーラーン地方はイランでも例外的な多雨地方であり，イラン有数の米作地帯でもある。この地域の独自性の一端は映画『バーシュー』を引き合いにだして本章第1節でも触れたとおりである。だが同時に，ギーラーン地方をイランの全国レベルにおける典型的な一地域として位置づけることは躊躇される。全国的にみればギーラーン地方はむしろ例外的な地域であり，典型であるというにはいささか無理があると考えられるのである(17)。

これはギーラーン地方に隣接するもう一つのカスピ海沿岸地域であるマーザンダラーン地方についてもあてはまる。この地方はギーラーン地方と対照的に，ラシトに対応する地方的な中心都市が明瞭には存在しない。その代わりにアーモル，バーボル，サーリーなどの小都市群が地域内に複数の中心として点在している。この地域も相対的には個性的な小地域を形成していると言いうるだろうが，同時にそれはテヘランからの影響を特に強く受けているという意味では，テヘラン地域圏のなかの小地域として位置づけられるべきであろう。

ゴム，アラーキ，ハメダーン，ザンジャーンなどの諸都市もまたそれぞれ相対的にはテヘランから独自の位置を保っている。ゴムは何よりも宗教的な権威の中心としてテヘランに対峙しており，またハメダーンはクルド住民が多いという意味でクルド地域との関係も密接である。またザンジャーンはテ

ヘラン地域とアゼルバイジャン地域の中間的な地点に位置する。だがこれらの都市を中心とする地域は同時にテヘランからの影響力の強さ，あるいはテヘランとの関係の強さが顕著であり，その意味でテヘラン地域のなかに位置づけることが可能だと考えられるのである。

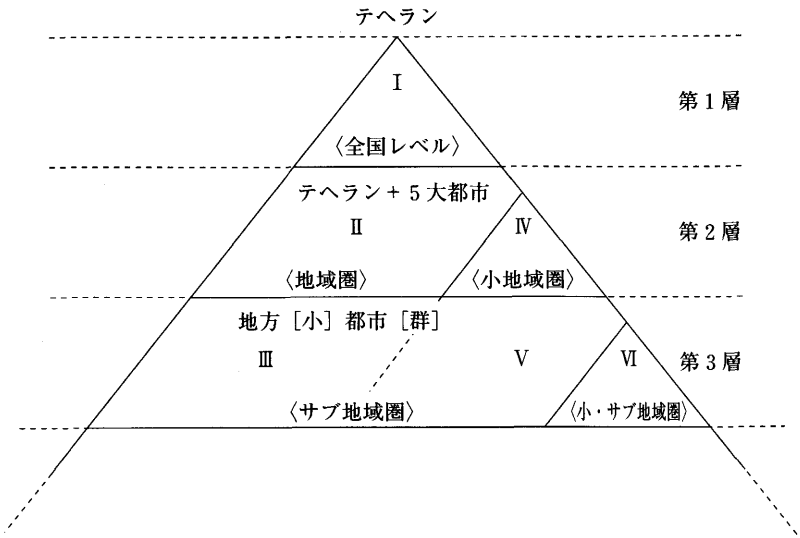
一方第2のグループにはケルマーンシャー，ホッラマーバード，オルーミーエ，アルダビール，ヤズド，ケルマーン，ザーヘダーンの7都市が含まれる。地図1をみれば明らかなように，これらの都市は大体において上述の6大都市を中心にもつ巨大な地域圏の隙間を埋めるような位置に存在している。これら都市群もまた六つの地域圏に次ぐより小規模な地域圏の中心となっている場合が多い。ケルマーン，ヤズドなどの沙漠の淵に位置する都市群はその例である。またクルディスターン，バルーチェスターンなど中央権力と政治的緊張関係にあるエスニック集団は，多くの場合このような位置において相対的に独立した地域圏を形成しているといえる。

さらにマシハド地域圏とテヘラン地域圏の狭間に位置するトルキャマン，タブリーズ地域圏とテヘラン地域圏の狭間に位置するタートもそれらと近い位置にあるといえるかも知れない。ホッラマーバードの場合はさらにクルド地域の南の中心であるケルマーンシャーとアラブ地域の中心でもあるアフワーズ地域圏，そして巨大なエスファハーン地域圏に挟まれており，ロル(クルドに隣接する遊牧民）の住民が多く居住する個性的な町だが，地域圏としてはさらに小規模でその独自性も相対的に弱いと考えられる。

オルーミーエとアルダビールについてはどうだろうか。これらは距離的にいえばタブリーズの影響下にあるとみることもできようが，同時にそれぞれが相対的にタブリーズから自立した独自の地域圏を形成しているという点は無視できない。

ここで言及しておく必要があるのは，ザーヘダーンにおける近年の突出した人口増加であろう。表2をみると明らかに，この35年間のキャラジとザーヘダーンの人口増加は突出している。だがそれぞれの事情はほとんど対照的である。すなわちキャラジは上述のようにテヘランのベッドタウンとして急

図1　イランの地域的構成の摸式図



（出所）　筆者作成。

激に膨張してきたのに対し，ザーヘダーンはイラン国内においてテヘランから最も遠く離れた広大なスィースターンおよびバルーチェスターンの，イラン側におけるほとんど唯一の人口集中の中心として急成長したと考えられるからである。

以上のようにイランを全国レベルでみた場合，その地域的な構成はテヘランを頂点とするゆるいピラミッド型の階層構造をもっていると考えることができる（図1）。その場合テヘランは強力な地域的な磁場をもっていると同時にほぼ全国的な中心でもある。そして第2層にはテヘラン，マシハド，タブリーズ，エスファハーン，シーラーズ，アフワーズを中心とした六つの地域圏が位置している。これらは大方200～300キロメートルの範囲を基準として考えられるだろう。

これらの基幹的な地域圏のあいだを埋めるように，ケルマーンシャー，ザーヘダーン，ケルマーン，バンダルアッバースなどの地方都市を中心とする小

地域圏が存在する。これらのうちの幾つかはまたクルド，バルーチ，トルキャマンなど中央権力と緊張関係にあるエスニック集団の居住地でもある。

またテヘラン地域圏におけるアラーキ，ザンジャーン，ラシト，あるいはタブリーズ地域圏におけるオルーミーエ，アルダビールといったように，各地域圏はそれぞれ地方（小）都市（群）を中核とした相対的に自立的な小地域圏を内包している。それをここでは上記の小地域圏と区別してサブ地域圏と呼ぶことにしよう。それらサブ地域圏がいわばピラミッド構造の第3層を形成していることになる。

このような見取り図のなかで，個々の具体的なむら（deh）はどこに属しているだろうか。常識的には上述のピラミッド構造のさらに下部，第5層か第6層あたりがむらの位置であるといえそうだが，筆者はここでそのような考え方を採らない。イラン全国で1986年現在6万5000を数えるというむら（deh）は，中央が定めた行政区分の最小単位である1582の「地区」（dehestan）とは全く別の概念であるが，この「都市の外部にある地域的・社会的な最小単位」の一つの形態としてのむら（deh）を，ここで問題にしている地域的構成の全国的な見取り図の最下部に位置づけることは不適切であろう。むしろ各々のむらは現在までに極端にその数を減らしてきた遊牧社会とともに，その地理的な立地（中心都市との距離や幹線道路との位置関係をここでは意味する）に応じて上記のピラミッド構造の各層にわたって位置づけられ，地域圏の具体的な構成要素をなしていると考えるべきではないだろうか。

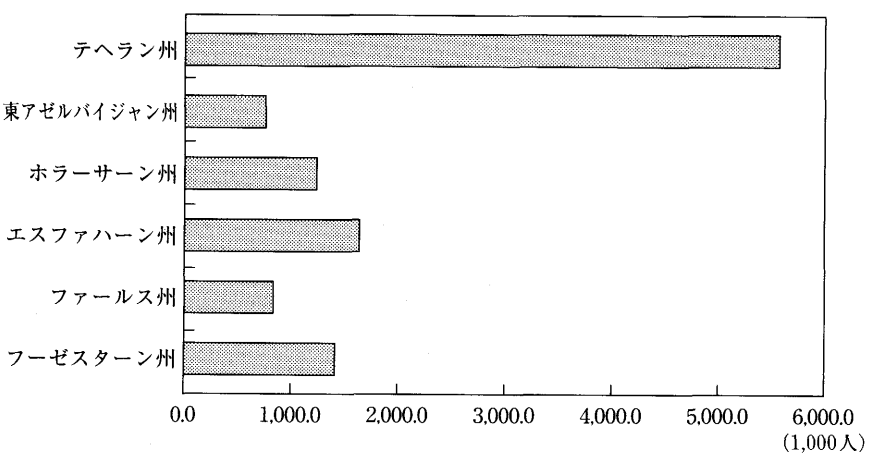
その意味では具体的なむらまでを念頭においた場合，ピラミッド構造の比喩はむしろ不適切であって，その代わりに樹系図のようなものを念頭に置くべきかもしれない。その場合むら（deh）という蕾は必ずしも枝の先端につくものではなく，ある場合には幹や太い枝に直接つながっているというイメージになるだろう。

ともあれ図1のなかでいえば，各むらは図中の第Ⅰ象限から第Ⅵ象限（あるいはそれ以降）のどこかに位置するものと考えることができる。例えばサフィーネジャードの調査で有名なテヘラン近郊のむらターレバーバードは第

I象限(もしくは第2象限)，第3章で言及されるマルヴダシト近郊のむらヘイラーバードは第III象限に属するというがごとくである。なお図1のなかで〈小・サブ地域〉と名付けた第VI象限は，上記の考察からの推論として仮に設けたものだが，実際問題として，例えばギーラーン地方のラシトから離れた小さな町の近郊の農村を，第VI象限の〈小・サブ地域〉に位置づけるべきかそれとも第4層の〈サブ・サブ地域〉に位置づけるべきかは各地方都市の置かれた具体的・個別的な状況に左右される面が強く，にわかには決し難い問題となるであろう。

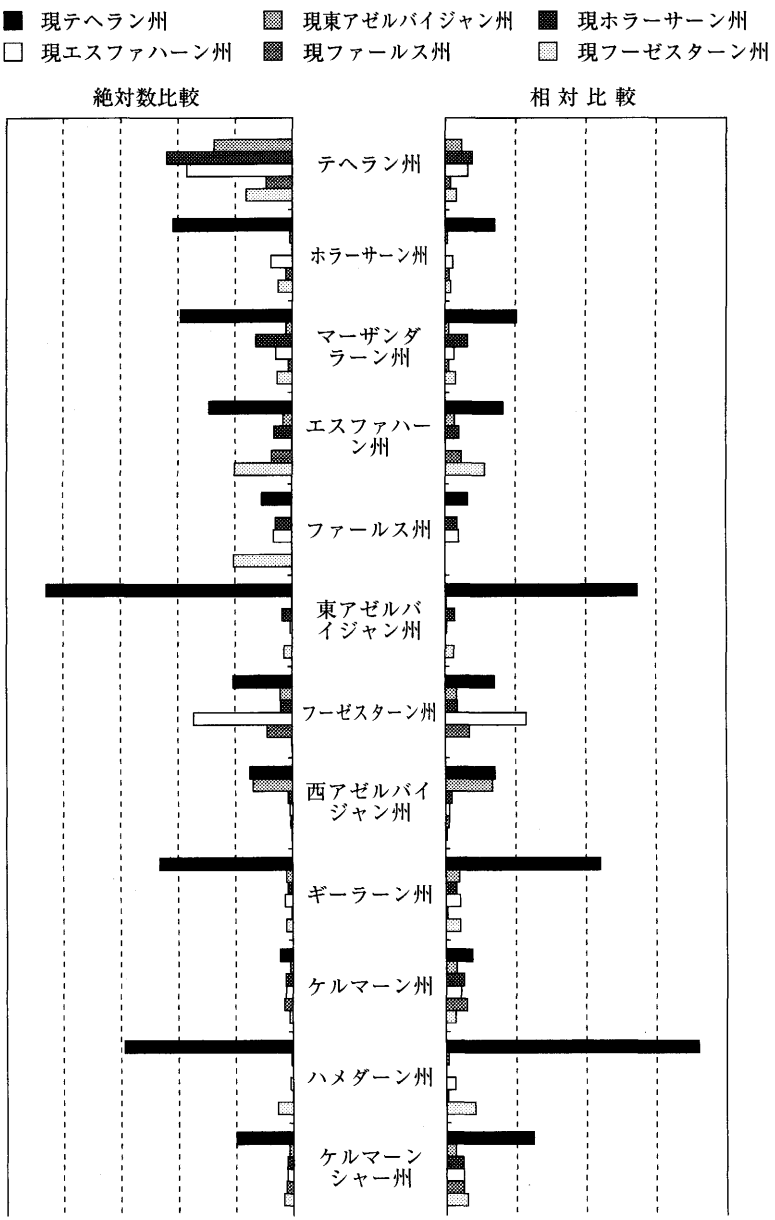
ところで以上のような地域構成のモデルをもとに考えた場合，具体的にイラン国内のどのような様態が見えてくるだろうか。ここでは最近発表された人口統計予備センサスの報告[18]を材料に，人口の移動からみた各州ごとの結び付きのあり方を素描してみることにしよう。ただしここでは資料上の制約から，便宜上州単位で議論を展開することにならざるをえない。またイランの主要6地域圏は，ここでは近似的にそれぞれの中心都市の属する州をもって代替させることとする。これらの点については，1996年実施の最新のセン

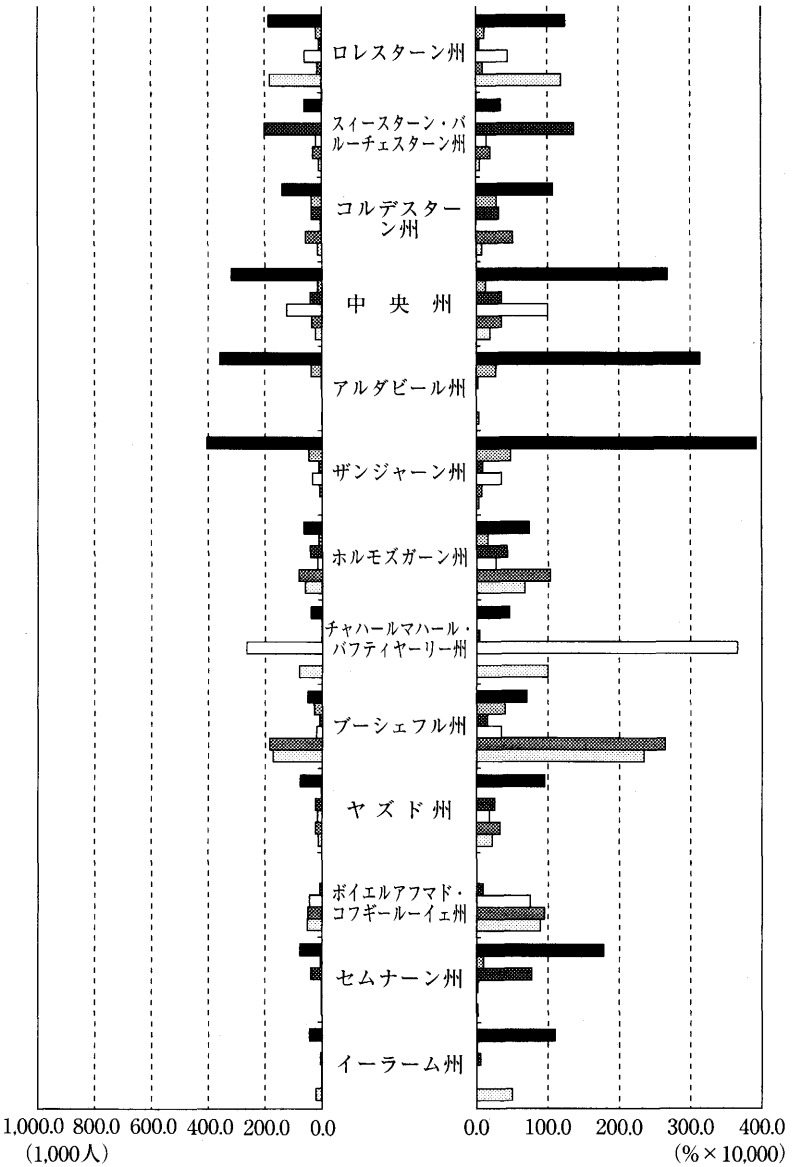
図2　〈主要〉6州への流入人口比較



(出所)　筆者作成。

図3　イラン人口の各州からの移住状況





(出所)　計画予算庁イラン統計センター『統計センサス　1973/4年』(1994年10/11月刊)のデータより筆者作成。

サス結果が公表された暁にはより精緻な議論が可能になると期待される。そこでこれ以降テヘラン州に言及するときはテヘラン地域圏を，ホラーサーン州はマシハド地域圏を，東アゼルバイジャン州はタブリーズ地域圏を，エスファハーン州はエスファハーン地域圏を，ファールス州はシーラーズ地域圏を，またフーゼスターン州はアフワーズ地域圏をそれぞれ念頭に置いているということに留意していただきたい。またこの報告から読み取られる結果が，センサス時点での歴史的制約（イランは1988年時点までイラクとの戦争下にあったことなど）を強く受けている可能性のあることを付言しておく。

さて，上記報告のなかの人口移動に関する部分を，各州<から>主要6地域圏に対応する6州〈への〉移動に注目してまとめた結果が図2および図3である。図3の左側には「絶対数比較」と記してあるが，これは全国規模でならしてみた場合，過去5年のあいだに各州からどれだけの人数がどこへ移住したかを示している。また右側の「相対比較」は同じデータを各州の人口数で割った値であり，これによって各州ごとの人口の流出傾向が知られる。ここでは主に各州の相対的な比較を目的としているので単位は直接関係ないが，「絶対数比較」は1000人単位であり，また「相対比較」は各州の人口に対する百分率（パーセント）の1万倍である。

最初に六つの地域圏に対応する<主要>6州の流入人口を図2で比較してみよう。先に述べたようなテヘラン地域圏の全国的な影響力が，テヘラン州への流入人口の突出というかたちではっきりと読み取れる。次に流入人口の多いのはホラーサーン州ではなくエスファハーン州である。16世紀の末以来サファヴィー朝イランの首都であったエスファハーンを中心にもつエスファハーン州が多くの流入人口を受け入れている理由は，何よりもイラン高原の中央部に位置するという立地条件の良さに求められるだろう。6州のなかでは東アゼルバイジャン州とファールス州の流入人口が最も少ないが，それでもそれぞれ100万人近い移住者（5年前に別の州に居住していた人口）があったことになる。

次に流出側からの検討に入ることにしよう。まず図3の「絶対数比較」の

方から検討すると，最初に明らかなことは人口の流出数が必ずしも各州の人口規模に比例していないということである（図3の各州は人口規模の大きい順に配列してある）。特にテヘラン州への人口移動が顕著なのはホラーサーン州，マーザンダラーン州，エスファハーン州，東アゼルバイジャン州，ギーラーン州，ハメダーン州，中央州，アルダビール州，ザンジャーン州の全9州であり，このうち特に東アゼルバイジャン州からの移住者が突出している。確かに従来からアゼルバイジャン地方からの（アゼリーの）テヘランへの移住者が革命後増加していることはとみに指摘されていることであり，また1990年代の初頭に日本に流入したイラン人のうち実際にはアゼリーが多かったという事実もまたタブリーズ地域圏→テヘラン→成田という人口の流れとして理解するべきなのであろう。

それはともかくとして，地理的に遠隔なファールス州とフーゼスターン州を除いた主要3州(およびタブリーズ地域圏の一角を占めるアルダビール州)からテヘラン州への移住者が多いという事実は，これら地域圏とテヘランとのあいだの結び付きが無視できないほど強いことを示している。このことはテヘランが全国的にも強い磁場を形成していることを物語っており，筆者が先に指摘したテヘランの二重の（全国的および地域的）性格のうち，全国的な影響力の方を具体的に示しているものといえる。また図3において，テヘラン州からの流出がほぼすべての主要地域圏に向かっていることもこれを裏付けている。それにしてもテヘラン州からの人口の還流もまた無視できないほどに大きいことが，この図からは読み取れる。ただし右側の「相対比較」の方をみれば明らかなように，この現象はテヘラン州全体のなかでは必ずしも大きな割合を占めているとは言い難い。

一方地図1をみると明らかなように，残るマーザンダラーン州，ギーラーン州，ハメダーン州，中央州，ザンジャーン州の5州の州都はすべてテヘランから300キロメートル圏内に位置しており，上述の地域圏モデルでいえばテヘラン地域圏のサブ地域圏にあたる。特に人口規模の比較的小さいこれらの州からの移住が全国レベルでみて顕著であるということは，テヘランの地域

的影響力が州境とは無関係にいかに強力に働いているかを物語っているといえよう。

つぎに全国レベルにおいて顕著なのは，エスファハーン州，ファールス州，ロレスターン州，ブーシェフル州からフーゼスターン州への移住である(ロレスターン州はテヘラン州へ，ブーシェフル州はファールス州への流出も多い)。これは一部には，フーゼスターン州にある港湾施設や石油関連産業などがかなり広い地域から労働力を吸収している結果であろうと推察される。なおフーゼスターン州からの移住先としては，エスファハーン州が多い。

つぎに，「相対比較」の検討に移ろう。この図から全体的に言うことができるのは，移動の方向がそれぞれの州の相対的な位置関係に強く規定されているということである。例えばカスピ海沿岸地域では，東側のマーザンダラーン州からはテヘラン州に加えてホラーサーン州への移住が多いのに対し，西側のギーラーン州ではテヘラン州への移住が突出している。ロレスターン州からはテヘラン州およびフーゼスターン州に多く流出しており，イーラーム州も同様である。スィースターン・バルーチェスターン州からは北上してホラーサーン州に移住する者が多い。

クルディスターン州からはテヘラン州とファールス州に多く流出，また先にテヘラン地域圏のなかに位置づけた中央州は，同時に隣接するエスファハーン州への流出人口も無視できない。ホルモズガーン州からはおなじ「南」(jonub) の地方に位置するファールス州およびフーゼスターン州，そしてテヘラン州への移住が多く，チャハールマハール・バフティヤーリー州からはフーゼスターン州およびエスファハーン州への移住が多い。ブーシェフル州からはファールス州およびフーゼスターン州への移住が顕著であり，ボイエルアフマド・コフギールーイェ州からはこれにエスファハーン州の移住が加わる。またセムナーン州からは西のテヘラン州と東のホラーサーン州に多く向かっている。

だが以上のような全体的傾向の一方で，州ごとの相対的な位置関係といった単純な論理では説明できないような現象もまた多く読み取ることができる。

例えばロレスターン州，クルディスターン州からエスファハーン州への移住や，チャハールマハール・バフティヤーリー州からファールス州への移住がほとんどみられないのは何故だろうか。またギーラーン州から東アゼルバイジャン州への移住も意想外に少ないと思われる。ファールス州やケルマーン州のようにテヘランへの移住を含めて全体的に流出人口が少なく，相対的に孤立した印象を与える州が存在する理由は何だろうか。近年水資源の不足から人口の流出が危惧されているヤズドを州都にもつヤズド州にしても，流出する人口の割合は案外と低い。これら3州がテヘランなど他の地域と隔絶しているわけではないことを考慮すれば，この現象はそれぞれの地域圏の個性に帰するほかないことになる。これらの現象にここで一義的な説明を与えることはできないが，ともかく図3からこのような現象が読み取れるという事実は，今後さらに歴史的・地理的な解釈を加えつつ地域圏に関する具体的考察をすすめる際の課題ともなろう(19)。

第4節　ガズヴィーンの地域的特質——事例的考察

一般に人は異邦人に遭遇したとき，どのように彼と最初の関係を測ろうとするだろうか。多分「どこからきたのか」，「先祖は誰か」，「信じている神は何か」，「言葉が分かるか」などの問いをもって彼の素性を知ろうと努めるだろう。第1節で触れた映画『バーシュー—小さな異邦人』では，見かけぬ少年バーシューに気づいたギーラキーの女ナーイーは最初石を投げただけで去るが，次にパンを与えようとし，さらにバーシューには理解できないギーラキー語（ギーラーン地方の方言）で「あなた誰？」，「ムスリム？」，「何て肌が黒いの？」，「口が聞けないの？」と矢継ぎ早に質問を浴びせる。

このような問いが本来持っていた豊かなヴァリエーションを，近代世界は極めて単純な選択肢の中に閉じ込めてしまった。「どこから」は「どの国から」に，「先祖」は「どの民族」に，「信じている神」は「どの宗教」に，「言葉が

分かるか」は「どの言語」に収斂してしまったのである。

だが本来，異邦人とは土地を異にするひとのことであり，その場合土地とは近代的な均質空間とは全く異質の「固有」なる存在であった。日本において「県民性」という言葉で理解されるような空間的「固有性」は，例えば文化人類学の立場から「歴史的に醸成された地域別の人格および行動類型上の偏差」として経験的に捉えられてきた。これに比較しうるような社会的通念をイランにおいて探すとすれば，よく言われる「ラシティーは……」，「エスファハーニーは……」，「ヤズディーは……」，「タブリーズィーは……」といった，専ら余所者によるある地方出身者の〈悪口〉だろう。ここで興味深いことは，これらの出身者の呼称が，多くの場合領域的な地方あるいは行政区分ではなく，主要な都市の名称に結び付けられていることである。このような点にもまたイラン社会における「地域」のあり方を考察する手掛かりが隠されていると思われる。例えば昨年度の研究会の成果である『イランの中央と地方—研究動向・資料紹介・文献目録—』の第7章に収録されている八尾師編の地方誌・史の文献目録をみても，イランの地方誌・史の約半数程度は都市名を書名に冠している。換言すれば，イランにおいてある固有名に気質あるいは風土のイメージが結び付けられているのは，第一義的には主要な都市なのである。

だが同時に，イランにおいてある都市名が示しているのは，多くの場合人口が集中しているという意味での狭義の「都市」ではなく，時にその後背地をも含むより広範かつ曖昧な概念であることに注意する必要がある。これを感じ取るための具体的な一例として，ここではガズヴィーンを中心とした地域を取り上げてイランにおける地域性の問題を検討してみよう。試みに『ガズヴィーンの地』の冒頭部に置かれた，「ガズヴィーンの土地の地理的立地と自然条件」を，少し長文になるが以下に訳出し，検討を加えてみる[20]。

「14ほどのデヘスターン（地区）を周囲に擁するガズヴィーンの土地は，山地部と平野部の二つの地域に分けられる。山地部の方はアラムート，ルードバール，エクバールの山麓部，ペシゲルダッレを擁し，北方に位置する。

この区域においてはアルボルズ山脈が西北方のギーラーンの地から南東方に向かってガズヴィーンの土地に連なっている。ガズヴィーンの土地のこの連峰の有名な山頂としては，サイヤーラーンとアラムートの名をあげることができよう。

南側の乾いた山裾にあるアルボルズの谷間はみな狭く，傾斜が多い。そのなかで最も居住性が良く，人も多く住む渓谷は，シャールードの渓谷で，なかでもターレガーンとアラムートが有名である。アルボルズの南側の渓谷はセフィードルードへ流れ込んでいる。山地部がチャールース渓谷とセフィードルード川を東西に隔てているが，地域の南のシャールード川はその地域を北と南の二つの部分に分けている。北側の連峰は，東から西に順にターレガーン，サイヤーラーン，アラムートと連なり，アラムートの西方に標高4400メートルのソレイマーン丘があって，その左の斜面にセフィードルード，かつて火山の一つであったダルファジ（訳注：ダルファク，標高2770メートル）の山頂へと連なる。シャールードの南にはズィヤーラーン，サブズプーシ，ハルザーン等々の山々があり，古くから南北に通ずる数本の道があって，そのうちの何本かは幾つもの谷を抜けてマーザンダラーンの海岸にまで至るものであったが，それらの道は上記の山々の有名な峡谷，例えばサマムバール，アールーチェシメなどを抜けていた。これら街道はガズヴィーンの平野部をシャーサヴァール，ランゲルード，ラシトなどに結びつけていた。ガズヴィーン平野の西側の地域にはチャルギャズと呼ばれる幾つもの峰が南北に走り，ガズヴィーンの地をザンジャーンおよびハムセと分かっている。その中間にはソルターニーエ，ターロムが位置する。この土地の南の地には，幾つかの丘陵が平行に走り，それはラーマンドと呼ばれる。

この丘陵はザハラー地区の東北に位置するのである。

南西部の地域においては，上記地域がハルガーンおよびダルゴズィーネ・ハマダーンに連なっている。

ガズヴィーンの地は東の方角では何の障害もなくサーヴァジバラーグの

平野に連なっているが，この平野は現状ではテヘランの地の一部であり，ターレガーン山によってターレガーンと分かたれている。

このようなガズヴィーン平野を潤している主な河川は以下のとおり。アブハルルード川，この川はソルターニーエ周辺に水源をもち，西北方から南西方向に向かって流れ，アブハル，ヒーダジ，サーエンガルエ，ホッラムダッレを潤した後，現ターケスターンに及んでドゥダーンゲの幾つかの農村を潤している。

ハルルード川はハルガーンハムセのゲゼルダーグ山地に水源をもち，ガズヴィーン—ハメダーン街道のアーブギャルム地区にあって西北方向に流れている。アーヴェ，カランジーンといった支流が合流した後，アフシャーリーエ，ラーマンド，ザハラーを通過してサーヴァジバラーグに至る。この地域ではシュールとキャルダーンがこれに合流し，ルードシュール川と名前を変える。さらにシャハリヤールでキャラジ川やその他の川と合流し，シュール川の名前のままで塩地とホウゼソルターン湖に至る。

ハージーアラブ川は中央山岳地から水源を得，サグザーバードまで延びている。年によっては洪水の発生によってその水量が増加する。シャールードとアラムート川もまた，この地域における有名河川であり，アラムート地区に関する議論のなかで言及することになろう。

全般に言いうるのは，ガズヴィーンの土地は特に平野部においては常に水不足に直面してきたのであり，カナートあるいはカーリーズによって大変に苦労して必要な水を確保してきたということである。

この土地の風土気候の条件（waz'-e ab-o-hava）は全体として山地部では良好，平野部においては冬寒く夏暑い。この地域の大きな河川の両岸の地域の気候は年間を通じて大きく変化し，全般的にいって高い丘陵や山間部のような快適な気候ではない。

ガズヴィーン地域の平均降雨量は年間300～400ミリであり，降雨量からみるとこの地域は二つの地域に分けられる。一つは半乾燥地域，すなわち北側と西北方の地域であり，残りの地域は乾燥地域ということになる。

天からの恵みである水の一部はこの土地においては様々な風の影響で蒸発して失われてしまい,利用することができない。ガズヴィーン地域の様々の風は，気候条件の変化と湿度，その結果として農業への影響があるため，極めて重要といわねばならない。ガズヴィーンの土地には2種類の有名な風があり，それぞれ温風と寒風という。

温風――この地方の在住者はこの風をラーズ（シャレ）と呼ぶ。その吹く季節は春の初めから夏のあいだであり，南東方向から吹いてくる。時には秋の初めから冬にかけても2，3日この風が吹くことがある。この風の影響で春から夏のあいだはこの地域の空気,特にガラーサグザーバード,フーゼニーン，ブーインザハラー，ラヒーマーバードの暑さは堪え難いほどになり，蒸発の多さと湿度の低さの結果，被害の出る条件が揃うことになる。他方この風は砂や土の移動の原因ともなり，その帰結として農村部やラヒーマーバード，コラーダッレなどの一部の土地が疲弊していることは有名である。

寒風――この風を五月風とも呼び，方向は北と北西方向である。吹く地域は広範囲に及んでいる。この風は年間を通じて吹き，夏季には気温を下げる働きをし，激しい蒸発を抑える働きをする。この意味でこの風はこの地域の農業にとっては有益である。これ以外にも季節によって吹く一種の寒風であるコハキとガーグザーンの風もこの地方には存在する。

各地域ごとに地理的，風土気候的条件と，各地区の生産条件については議論の余地があるため，ここでこの土地全体の地理条件および自然諸条件についての説明を終え，各地区ごとの具体的な説明に移りたい。」

以上が1970年代初頭に刊行された『ガズヴィーンの地』の冒頭に置かれた地理的・自然的概観の全文である。この何でもない文章から，この地誌の筆者が抱いているガズヴィーン一帯の地域概念の独自性をどのように抽出することができるだろうか。

ここにおいてまず第1に指摘しなければならないことは，対象とする地域を「サルザミーネ・ガズヴィーン」あるいは「マンタゲイェ・ガズヴィーン」

と呼称しており，行政区分上の呼称である「シャハレスターネ・ガズヴィーン」という名称を用いてはいない点である。このことは本書の筆者が扱っている地域が，行政区分的に安定していないという歴史的事実に照応する。事実この本が刊行された1970年当時はガズヴィーンは中央州に帰属していたが，79年の革命期にザンジャーン州に併合されている。そしてこの文章の冒頭部において「14ほどのデヘスターン（地区）を周囲に擁する」と書き出しているが，これは1966年10～11月時点においては13だったのであり，また76年同月時点では16に増加している。その中間時点における状況なのである。ちなみにこのようなデヘスターン（地区）の増加は，通常ある地域の人口規模が一定数以上（地方により4000，6000，あるいは8000）になった場合に行なわれるものであり，その場合「自然，文化，経済，社会的な同質性」に考慮するという法律上の建前になっている[21]。ところが革命後のザンジャーン州併合の後，1986年時点の行政区分をみると，デヘスターンの数は11であり，さらにターロムサファリー郡が飛び地としてシャハレスターネ・ガズヴィーンの一部を構成している。これは3枚の歴史的な行政区分図を比べてみれば明らかなように，ズィヤーアーバード郡の5デヘスターンがすべて別のシャハレスターン（市）の許に移ったことによる。

これらの地区の生態的な特徴を同じ『ガズヴィーンの地』から引くと，以下のようである。「ガーグザーン地域の多くは山地で構成されており，ごく少数のむらのみが山裾や平野部に位置する。それゆえ多くのむらは夏には実に快適な気候に恵まれている」[22]。「この（ドゥダーンゲ）地区の農業の観点から見た条件の素晴らしさと言及すべき美点，そして主要な農村において幾つもの古いタッペ（遺跡のある丘）や貴重な建造物が存在すること，これらはすべてこの地域が遙か古代から現在に至るまで常に人々の棲む土地であったことを示している」[23]。「この（アフシャーリーエ）地区の農業生産高は特に注目に値する程ではない……この地区には特に言及すべき遺跡・建造物は存在しない」[24]。これらの記述から明らかなように，アフシャーリーエ地区を除けば，ガーグザーン，ドゥダーンゲ共に生産力も高く，この地域で極めて重要な位

置を占めていたのである。

それでは1979年の革命後の行政区分の変更の結果，ガズヴィーン郡の飛び地のかたちになったターロム・サファリー郡に関して，『ガズヴィーンの地』の筆者はどのような捉え方をしているだろうか[25]。

「ガズヴィーンのデヘスターン（地区）の一つを構成するターロム地区は，ガズヴィーンとギーラーンの間に広がる広大な地域の一部であり，また同時にその地域全体をターロムと呼ぶこともある。ターロム・オリヤー郡(「上手」）とターロム・サファリー郡（「下手」）に区分されており，「下」ターロムはガズヴィーン地域の一部，「上」ターロムはザンジャーンの一部となっている。(注記：　ここでの「上手」「下手」は，日本での用例のように首都テヘランからの距離による呼称ではなく，土地の標高の差，ないしゲゼルオーズン川の上流・下流ということに基準を置いていると思われる。)

……（中略）

全体的に言って，ターロム地域は山間部に位置し，ザッリーンルード川が東の方角から西に向かって流れている。北側の地域にはアルボルズ山脈の尾根が連なり，その南側にはザンジャーンとアブハルの北側の山々がある。上述の尾根からは複数の谷がザッリーンルード川の渓谷にまで続いており，むらむらの多くはこれらの谷に沿って存在している。

……（中略）

ターロムのむらの多くはザッリーンルード川の水を利用しているが，幾つかのむらでは豊かな湧き水や川の支流を用いている。

ターロムの気候風土はすべてのむらで一様ではなく，各々のむらの立地に左右されている。例えばザッリーンルードのそばにあるむらは，冬は穏やかな気候だが夏には高温多湿になる。山裾にあるむらは中間的な気候，尾根の方にあるむらは寒いがまた同時に快適な気候をもつ。」

ちなみにこの同じ地域を，ザンジャーンの方では『ザンジャーン史―オラマーと知識人―』が「ターロムオリヤー・サファラー地区」として扱っている。そこでは二つのターロムを区別せずに「118の農村をもち，うち63村は山

地にあって温暖，47村は平野部にあって気候温暖だが少し暑い。農業のため水を湧き水，カナート，多くは引いてくる。この地区の生産物は穀類，米，綿，砂糖大根。多くのむらでは無花果，石榴，ハシバミその他の実が採れる。……」としている[26]。いずれにしてもこの地域における環境的な一体性は薄く，またむらむらは谷に拠っているため歴史的にも相互の交通はあまり深化・拡大しなかったことが予想される。そのようななかでガズヴィーンとザンジャーンのどちらに帰属するかという問題は，専ら行政的な境界線の問題に収斂していったのではないだろうか。そしてこのことはターロム自体の地域的呼称の曖昧さにも反映されていると思われる。

なお本書『ガズヴィーンの地』の巻末に収められた「注解」のなかの一節では，「ガズヴィーン郡の境界について」と題して以下のような解説が加えられている[27]。

「本書ではガズヴィーンの土地の歴史的な過去に関する事柄を扱っているけれども，ガズヴィーン郡は以下に列挙する14の地区から構成されている。……（中略）

1966-67年に，『イラン国農村事典』（*Farhang-e abadiha-ye keshvar*, Entesharat-e Markaz-e Amar-e Iran）の第13巻所収の地図に基づいて，ガズヴィーン郡のバフシ（郡）およびデヘスターン（地区）への区分けが表（1）（略）のように発表された。

上記の区分けは1970〜71年になって再び変更され，表（2）（略）のようになった。

ここで注意すべきことは，近年における国家の行政区分の度々の変更は誠に残念なことに，その地域の住民の社会的必要に対する答えであるところの地理的な纏まりの個性を配慮した，論理的方法に基づくものではないことである。むしろ行政的な様々な思惑と，恐らくは圧力行使がこの変更に際して影響があったはずである。これに関して言いうることは，多くの場合地域（navahi）と土地（sarzamin）に関して古い区分の方がより妥当であり原則的であるように思われる。

——本文中においてアラムート地区の幾つかの遺跡，特に聖者廟(emamzade)に言及している際，行政区分上からはルードバール地区の一部であるむら（deh）の名前から名前が付けられた場合がある。これはアラムートとルードバールのデヘスターン（地区）が多くの場合に『ルードバール・アラムート』という一つの纏まりで記憶されているという事情による。」

このなかでとりわけ興味深い点は，行政区分の度重なる変更に対して「その地域の住民の社会的必要に対する答えであるところの地理的な纏まりの個性を配慮した，論理的方法に基づくものではない」と非難し，このような変更が行なわれる理由として「行政的な思惑」と「圧力の行使」をあげている点である。さらに筆者は「多くの場合地域（navahi）と土地（sarzamin）に関して古い区分の方がより妥当であり原則的であるように思われる」という指摘をしているが，これは本書のイランの地域区分を再考しようという狙いに照らしてみるととりわけ参考になる。そしてこの地域の行政区分上の位置づけが上述のようにさらに大きな変遷を被ったことを考慮すれば，本書の筆者が投げかけている問題は，ことガズヴィーン市に関して現在もなお解決されたとは言い難いことが理解されよう。

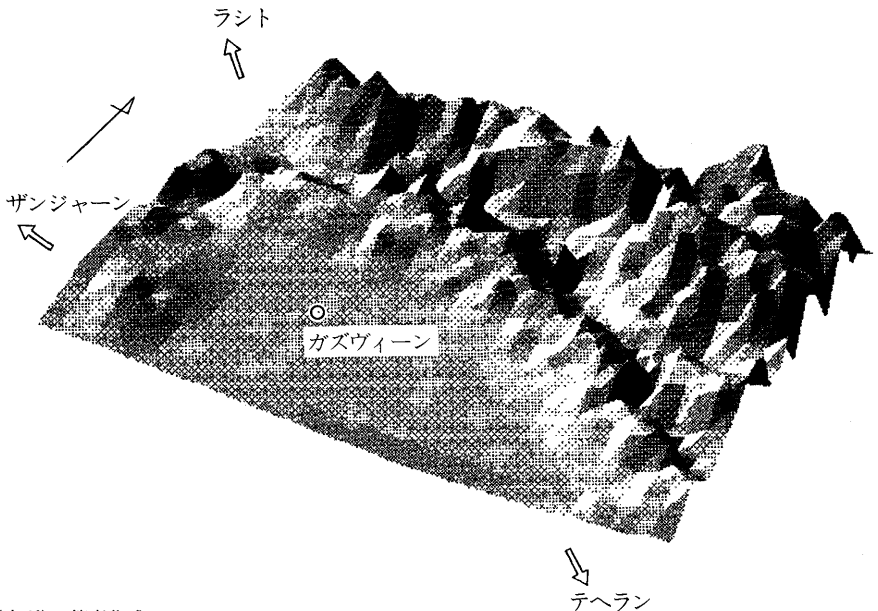
さて本書の冒頭の地理的・自然的概観の文章に戻ると，山地部の方はアラムート，ルードバール，エクバールの山麓部，ペシゲルダッレと四つの山地部の地名を列挙している。このうち最初の三つはデヘスターンに該当するので同定は容易であるが，ペシゲルダッレについてはどうだろうか。同書485ページの「表（1）」および同書486ページの「表（2）」の注記には「この行政区分においてはペシゲルダッレ地区はクーフパーイェ地区の一部ということになる」とある。ところでモイーンの辞書には(＝Feshkel-darre)として「ガズヴィーン市，アーブイェキ郡のむら(デヘ)，ガズヴィーンの東，ターレガーンの南」と説明があり，一方デホダーのルガトナーメにはケイハーン『政治地理』を引いて「ペシケルダッレおよびクーフパーイェは……エクバールの北にあり，……」とある。これらの説明は必ずしも地理的に一致していない点，注意を要する。ちなみに出典はMasud Keyhan ed., *Jografiya-ye mofas-*

sar-e Iran, *jeld-e 3* (*siyasi*), Tehran, 1311.であろうと思われる。だがルガトナーメがこの60年以上も前の本を引いて，村落数56，人口6000と記載している（原著を調べると，確かにそのように書いてある）のに対し，モイーンは人口4000としている。こちらの方はいつの時点の文献を引いているのであろうか。時代的変化に対する驚くべき無関心というべきであろう。ところで，1986年の人口センサスの農村リストにはこの名前は村名としても地域名としても掲載されていない。ここでさらに付言しておくとすれば，ペシゲルダッレはダッレ（谷）を巡るいかにも固有名詞的な名前であるのに対し，クーフパーイェは「山麓」ということであって，単なる普通名詞にすぎない。

以上のような点を総合して考えると，ペシゲルダッレ（＝ペシケルダッレ，フェシケルダッレ）という元来地理的・生態的条件に根差した地域概念は，行政区分上などで現在使われている幾つかの地域名とずれながらそれらを跨ぎ，あるいは重なり合うかたちで歴史的に存在してきたものであろう。もちろんこのような地域概念を，現在の行政区分との整合性を欠くという理由で無視することは簡単である。だが「多くの場合地域（navahi）と土地（sarzamin）に関して古い区分の方がより妥当であり原則的である」とする筆者ヴァルジャーヴァンドの見解を尊重するとすれば，イランの地域的構成の問題を考察する際に，このような重層的に入り組んだ地域的呼称を具体的に検証していくことは不可欠の作業であろう。

さて続いて『ガズヴィーンの地』冒頭の文章は，山と渓谷，間を通る道，そこを流れる川についての概観的な説明を展開する。このなかで筆者はいわゆる〈地域的な連続性〉の問題に繋がる以下のような興味深い指摘をしている。「ガズヴィーン平野の西側の地域にはチャルギャズと呼ばれる幾つもの峰が南北に走り，ガズヴィーンの地をザンジャーンおよびハムセと分かっている」。「ガズヴィーンの地は東の方角では何の障害もなくサーヴァジバラーグの平野に連なっているが，この平野は現状においてテヘランの地の一部でありターレガーン山によってターレガーンと分かたれている」。この指摘においては東のテヘラーン，西のザンジャーンを結ぶ街道の中間に位置するガズ

地図2　ガズヴィーン周辺の鳥瞰図



（出所）　筆者作成。

ヴィーン地方は，東側のテヘラン方面に向かって開放的であり（地域的な連続性を有し），その一方で西側のザンジャーンおよびハムセを中心とした一帯とはある程度分かたれている（地域的に断続している）ことが示唆されている（地図2を参照）。

ところで本書『ガズヴィーンの地』の全体の構成を見ると，第一部で地理的・自然的概観をしたのち，第二部で各地区毎に遺跡や歴史的建造物の解説を行なっており，ここが主要部分になっている。そして第三部において人類学的な概観を行なう。ところが第二部の冒頭においてキャラジが扱われていること[28]に，読者は些か驚かされるのである。なぜならキャラジは現在では通常テヘランのベッドタウンと看做されており，それがガズヴィーン周辺の地域を扱う本書のような書物において冒頭で扱われるのは筆者がよほど明確な地域概念を持っており，かつそれを主張しようとしていることを示してい

るからである。この点について筆者自身は特に説明をしていないが，巻末の地図（地図3）に筆者によるガズヴィーン周辺の地域像が明確に示されている。これによればこの地域は本来的にいって，自然条件的あるいは生態環境的にカラジ周辺を含めて一体的な地域圏を構成しており，一方ザンジャーン方面とはある種の境界線ないし断絶面が存在する。

この問題は，1994年8月に勃発したガズヴィーンの騒動を想起すれば，現在のイラン国内政治においても一定のアクチュアリティーを持っていることが理解されるだろう。この事件は94年8月3日に国会の公開会議で「アルダビール州」に続く「ガズヴィーン州」の成立法案が103対105の僅差で否決されたことに端を発し，市民がガズヴィーン市の金曜礼拝導師ホッジャトルエスラーム・ハーディー・バーリークビーンの自宅前に集まって国会の決議に異議を唱えたのである。混乱は翌日（木曜日）も続き，そのため，翌金曜日には内務大臣のアリー・モハンマド・ベシャーラティーがガズヴィーン市をテヘラン州に帰属させると発表し，即時発効した。その日のうちにバシージーが市内をパトロールするなどして混乱は収まったものの，3人の死亡と少なくとも50人以上の負傷が伝えられており，役場の建物も焼き討ちにあっている。

このような事態に至る歴史的な経緯としては，レザー・シャー王権のもとで地方行政組織の再編成が行なわれた際，ガズヴィーン市は中央州に編入され，その後も様々な恩恵を享受していたが，1979年の革命以降，中央州は2度にわたる編成替えを受け，ガズヴィーン市もその度毎に影響を受けることになった。そのうち最も最近の組織替えにおいてはテヘラン市とガズヴィーン市がともに中央州から切り離されることとなり，新たに設けられたテヘラン州は西方のキャラジまでとし，一方ガズヴィーン市はザンジャーン州に帰属することとなった。以来この処遇に不満を抱きつづけてきたガズヴィーン市民は，国家の財政を少しでも多く獲得するために，州として独立を求めるのが最善と考えるようになったのである[29]。

さて『ガズヴィーンの地』の筆者はこの土地の風土と生産について筆を進

める。彼は言う。「全般に言いうることは，ガズヴィーンの土地は特に平野部においては常に水不足に直面してきたのであり，カナートあるいはカーリーズによって大変に苦労して必要な水を確保してきたのである」。

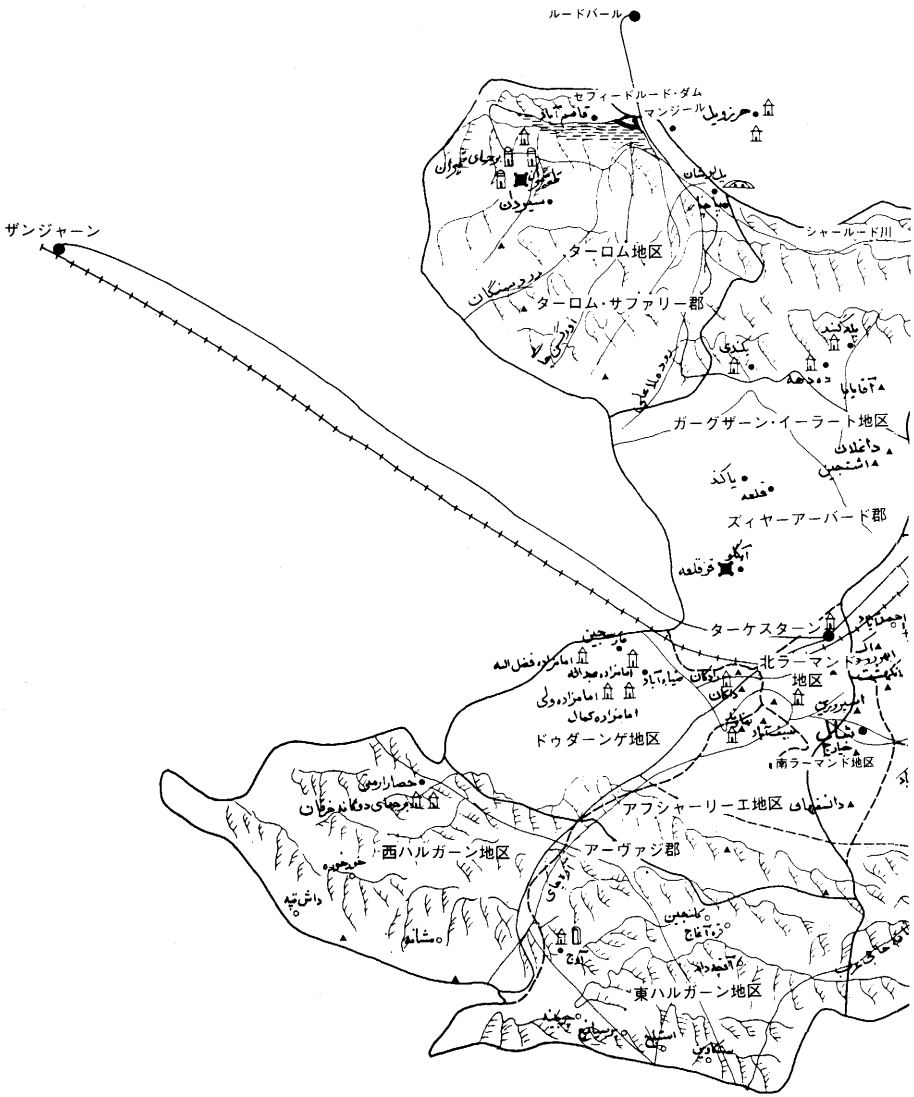
このような自然環境的な条件は，歴史的にみれば長い期間のあいだにも比較的変化を被り難いのであって，例えば17世紀の有名なフランスの旅行記であるシャルダン著『ペルシア紀行』にも以下のような記述が見出される。

「この州の他の多くの町と同様この町にも庭園はあまり多くない。土地が砂地で乾いている上，シャールード川の支流の細い川がたった一本流れているだけで十分な水量が得られぬためだ。そこでこの川の水の他にケリーズという地下水路を設け，山から水を引いている。ケリーズで引いて来たこの水は30尺（ピエ）の深さの地下水槽に貯えられる。ひんやりと冷たい水だが，味の方はすっきりせず，不味い。この水不足が原因で，夏の間はとくにカズビンの町の空気が重苦しく，不潔で不健康なものになってしまう。町に流れている水がなく，汚物を流し去る下水溝が設けられていないためだ。話によると，ペルシア人は町がイスパハンより美しくなって，王がこちらの方に住みたくなってしまっては大変と考えて，どうしてもシャールード川の水をカズビンに引かせようとしないのだそうである。こんなに水不足に悩んでいながら，町の食糧品は豊かで溢れるほどあらゆるものが揃っている。周辺部の土地は水に恵まれているので，家畜，穀物，果実，何でも実に豊かに産するのだ」[30]。

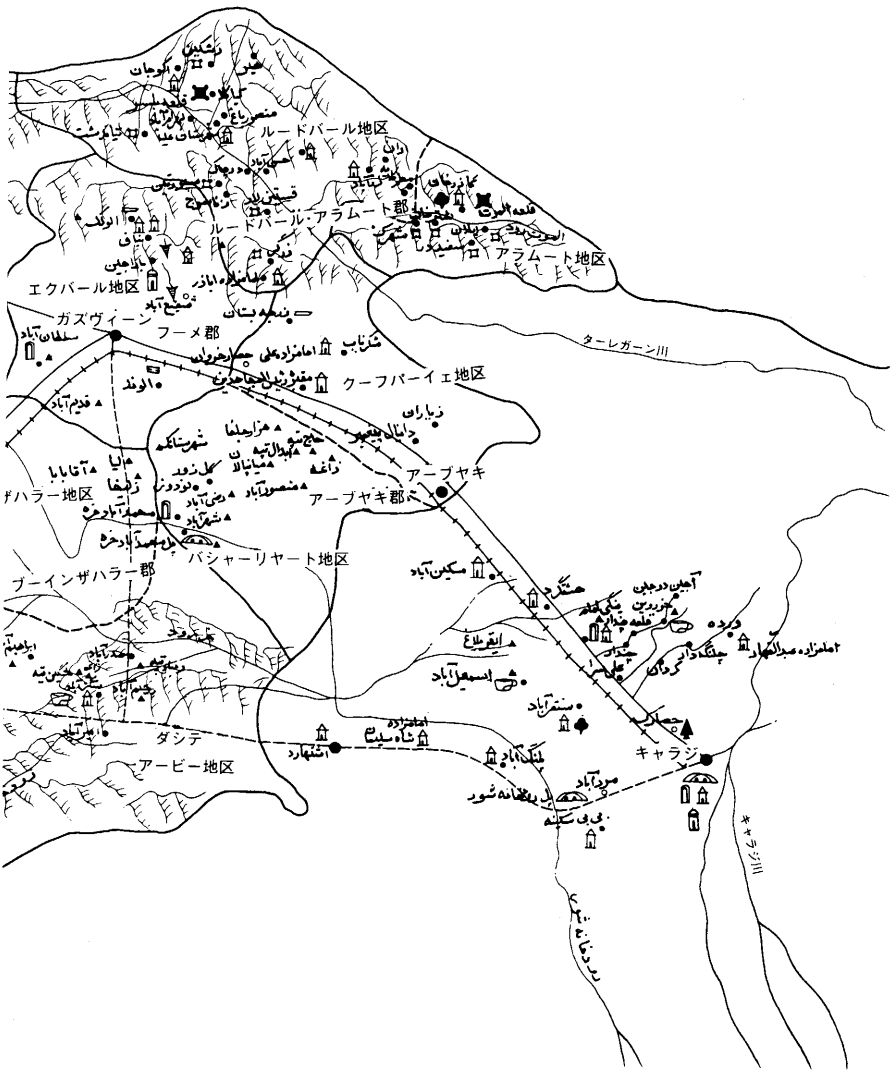
これなどはここで見ている地誌の記述とほとんど矛盾するところがない。だがいずれにしても，引用した最後の部分の「周辺部の土地」が具体的にガズヴィーン北方のアラムート，ルードバール，エクバール，クーフパーイェ（ペシゲルダッレ）といった山地部を指すことは明らかであろう。

いずれにしてもこの冒頭の文章の後半部が，河川を中心とした水の問題，山地／平野部における気候条件（気温，降雨量）の差，そして気温と湿度に重大な影響を及ぼす風の問題に割かれていることは極めて興味深い。ガズヴィーン一帯の地域が基本的に農業生産によって成り立っているという認識

地図3　ヴァルジャーヴァンド



『ガズヴィーンの地』の地域概念



が，ここでの議論の根底にあるからである。ここで想起されるのは，「水力社会」論を提唱したウィットフォーゲルの以下のような発言である。「水は作物栽培にとって根本的な唯一の自然的要因ではない。耕作しようと望む者は誰でも有用な植物，耕作可能な土地，充分な湿度，適当な温度（充分な日照と適切な成長の時期），適切な地形（起伏ならびに表土）を手に入れなければならない」[31]。「農業の他の本質的な自然的必要条件のいずれとも比較して，水は特殊である。温度と地形はそれが宇宙的，地質学的次元のものであるだけに，工業時代の以前以後を通じて人間の活動を完全にはねつけるか，いちじるしく制限してきた。これと対称的に，水は余りに遠大すぎたり，余りに重厚すぎたりして人間の操作を不可能とするほどではない。この点，他の二つの可変的要因である植物と土壌に似ているところがある。しかしそれはその変動の可能性とそれを操作するに必要な技術において，両者から大きく異なっている」[32]。ウィットフォーゲルはここで工業時代に先立つ農業時代の生産条件の重要な要素としての自然条件（＝生態環境），とりわけ水の占める特殊な位置について指摘しているが，この指摘は無論現在のイランにおいても十分に当てはまる。

以上のようにガズヴィーンを取り巻く地域圏の空間的な個性は，まさに序章で述べたような風土論的な考察を促すような性質のものであったと言いえよう。それは第2節のモデルを援用すれば，テヘラン地域圏とザンジャーン・サブ地域圏，ラシト・サブ地域圏の狭間に位置する独自の生態的空間であり，テヘランの影響の強さとその地形的な特質からして地図上で見るよりも実態は遙かにテヘランに近く引き寄せられた土地柄なのである。

第5節　結論にかえて

第2節では一般に多様な地域的・民族的構成をもっているといわれるイランの地域的な編成について全体的なイメージを得るために，主要6都市を中

心とする地域圏を想定し，その内部および外部に幾つかのサブ地域圏と小地域圏を配置したピラミッド型のモデルを提案した。ここでの説明は主要都市の人口規模から機械的に6都市を選択したかの印象を与えかねないが，もちろん人口規模だけでアフワーズとゴムのあいだに明確な線を引くことはできない。主要な地域圏を六つと設定したのは，これまでの筆者自身のイランでの体験やその他の知見にも基づいている。

このモデルに基づいて，最近の州間人口移動に関する統計データを素材にイランにおける各地域間の関係のあり方を素描してみた。ここでの説明の指標は専ら都市間の距離と位置関係，州ごとの人口および移動人口に限られており，第2節全体でも地域ごとの空間的・風土的な個性についての議論はほとんど展開していない。

第3節では一変して，テヘラン地域圏とザンジャーン・サブ地域圏，ギーラーン・サブ地域圏の狭間というような独特の位置にあるガズヴィーンという地方都市についての事例研究である。いわゆる地方誌の叙述を材料として，その個別的な風土的条件と行政区分問題の細かな叙述に終始した。第2節では筆者は各地域の風土的条件をほとんど度外視したが，第3節ではサブ・サブ地位圏ないしサブ・小地域圏にあたるような小さな個別的空間の境界と帰属をめぐる問題にあえて拘泥したわけである。ここで叙述のスタイルの転換は唐突な印象を与えるかもしれないが，筆者としては決して隔絶した二つの問題を無理矢理に接合したわけではなく，むしろ同じ問題に鏡の向こう側とこちら側から接近しようとした結果である。

筆者の実感としては，第2節の議論をより詳細な統計資料などを利用して幾ら細かく展開しても第3節のような問題をイランの全体図として描き出すことは不可能であり，また一方第3節のような地方誌的な叙述をイラン全域について集積しても，それが終にイラン全体図にたどり着くということはあり得ないように思われる。それはまさにそれぞれの叙述が拠り所にしている空間的理念の隔絶性を意味しており，各地域の単純な総和がイランの国土全体を意味しているのでないということは，第2節および第3節のなかでも既

に述べてきたとおりである。

本章におけるような方法論をめぐる議論は確かに無味乾燥なところがあり，研究者としては現地調査なり歴史文献なりの実際の資料について具体的な「事実」を蓄積するほうが遙かに近道であるという考え方もありうるだろう。だが現実には外国人研究者が一足跳びにイランの地方的な現実(本節の議論を敷衍すれば，テヘランも含めイラン国内で生起していることはすべて「地方的な現実」であるとすら極言できるが)に接近しても，その意味を直接的に解析することは現状ではほとんど不可能であり，よほど細心の注意を払ったとしても，局限された状況の特殊性と一般化の狭間で足をすくわれるのがせいぜいのところである。

このような現状を打破し，現に生きてあるイランの状況を少しでも掬いあげるためには，たとえどんなに貧弱なものであろうと自前の認識枠組みというレンズを設計しなければならない。その意味で本章は拙いものではあるが，その歪みまで含めていわば筆者による現時点でのイラン認識を正直に映し出した1枚のレンズである。

〔注〕

(1) ジャン-ベルナール・シャリエ（有本・田辺訳）『都市と農村』（白水社）第1章IIIを参照。ここで筆者は「第三次産業部門に従事する『基本的人口』が，本質的にその地域へのサービスのためのものと考えられる。だから，第三次産業の基本的人口が多い都市を，工業都市に対して『地域的中心地』と名づけることができよう」(34ページ)と言っている。イランの多くの都市はその構成要素にバーザールをもち，伝統的に商業的な性格を強く持っている。それだけ周辺農村地域の中心としての意味が大きかったことになる。

(2) É. Juillard, "La region: essai de définition," *Annales ds géographie*, LXXI-387, 1962, pp. 483-499.

(3) "Bazar," *Daneshname-ye jahan-e eslam*, Tehran, 1372 (1993/4), p. 307. この項目は革命後にイランで翻訳・編纂された各種のイスラーム百科事典のなかでもバーザールに関して特に詳細なものであるが，その末尾において「イランのバーザール」という一節が設けられており，*Encyclopaedeia Iranica*(?) を引用してイランのバーザールの一般的構造が述べられた後，代表的な例として

11のバーザール（アラーキ，エスファハーン，タブリーズ，テヘラン，マシハド，ガズヴィーン，ラール，カーシャーン，ケルマーン，シーラーズ，ヤズド）が取り上げられている。

(4) Ervand Abrahamian, *Iran Between Two Revolutions*, Princeton: Princeton Univ. Press, 1982, p. 11.

(5) Paul Ward English, *City and Village in Iran: Settlement and Economy in the Kerman Basin*, Madison, Milwaukee, and London: The University of Wisconsin Press, 1966.

(6) V.F. Costello, *Kashan: A City and Region of Iran*, London and New York: Bowker Publishing Company, 1976.

(7) English, *City and Village in Iran*…, p. 112.

(8) Lois Beck, *The Qashqa'i of Iran*, New Haven and London, Yale University Press, 1986.

Beck, *Nomad: A Year in the Life of a Qashqa'i Tribesman in Iran*, London, I.B. Tauris, 1991.

(9) Gene R. Garthwaite, *Khans and Shahs: A Documentary Analysis of the Bakhtiyari in Iran*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

(10) Jacob Black-Michaud, *Sheep and Land: The Economics of Power in a Tribal Society*, Cambridge, Cambridge University Press, 1986.

(11) Richard Tapper, *Pasture and Politics: Economics, Conflict and Ritual among Shahsevan Nomads of Northwestern Iran*, London: Academic Press, 1979.

(12) Beck, *The Qashqa'i* …, p. 26.

(13) Gene R. Garthwaite, *Khans and Shahs: A Documentary Analysis of the Bakhtiyari in Iran*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

(14) Keith McLachlan ed., *The Boundaries of Modern Iran*, London: UCL Press, 1994.

(15) Masoud Kheirabadi, *Iranian Cities: Formation and Development*, Austin: University of Texas Press, 1991.

(16) McLachlan ed., *The Boundaries* …, p. vii.

(17) ギーラーン地方の週市を中心にした地方文化の詳細な紹介として Kamioka Koji, Haneda Koichi and Yajima Hikoichi, *Periodic Markets in Gīlān: A Preliminary Report*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 1988 (in Japanese) を参照。

(18) *Amargiri-ye jari-ye jam'iyat 1372*, Markaz-e amar-e Iran, Sazman-e barname va budje, Aban 1373（『統計センサス1973／4年』計画予算庁イラン統計センター，1994年10／11月）。

なおイラン国内の人口移動を扱ったものとしては他に加納弘勝「中東・北アフリカとイランの都市化」(小島麗逸・幡谷則子編『発展途上国の都市化と貧困層』アジア経済研究所，1995年，155～187ページ)を参照。ただしこの時点では「移動に関する統計はテヘラン・シャーレスタンに限られ」ていたとされている(174ページ)。

(19) 中東地域における移動の文化的な重要性については，片倉もとこ『「移動文化」考—イスラームの世界をたずねて—』日本経済新聞社，1995年をも参照。

(20) Doktor Parviz Varjavand, *Sarzamin-e Qazvin*, Tehran, 1349, pp. 3-6 (Dr. パルヴィーズ・ヴァルジャーヴァンド『ガズヴィーンの地』1970／71年，3～6ページ).

(21) 1342年4月15日発効の「行政区画法」第3条。

(22) Varjavand, *Sarzamin-e Qazvin*, p. 291.

(23) ibid., p. 355.

(24) ibid., p. 392.

(25) ibid., pp. 393-394.

(26) Hajj Seyyed Ebrahim Musavi Zanjani, *Tarikh-e Zanjan*, Tehran, 1392 H. Sh (?) (ハーッジ・セイエド・エブラーヒーム・ムーサヴィー・ザンジャーニー『ザンジャーン史』テヘランヘジラ暦1392年(?)).

(27) Varjavand, *Sarzamin-e Qazvin*, pp. 484-486.

(28) ibid., p. 60ff.

(29) この事件の顛末についてより詳しくは『イランの中央と地方—研究動向・資料紹介・文献目録—』(アジア経済研究所所内資料・地域研究部No. 6-6，1995年) 所収の拙稿 (第2章) を参照。

(30) ジャン・シャルダン (佐々木康之・佐々木澄子訳，羽田正解説)『ペルシア紀行』岩波書店，1993年，410ページ。

(31) カール・A・ウィットフォーゲル (湯浅赳男訳)『オリエタル・デスポティズム—専制官僚国家の生成と崩壊—』新評論，1991年，34ページ。

(32) 同上書，36ページ。